

発表者：吉田昌幸

E-mail : k960055@ec.hokudai.ac.jp

Tel : 011-707-8389

論題：ナショナリズムと多言語性

副題：文化と<文化>の二つの視座からみたネーションに関する考察

0. はじめに：何が問題なのか？
1. 文化とナショナリズム
 - a. ネーション/ナショナリズム：文化からのアプローチ
 - (1)ゲルナーとスミス：ナショナリズムに対する二つのアプローチ
 - (2)フィヒテとルナン：エリートから見るネーション概念
 - b. 創造型ナショナリズムと再構築型ナショナリズム
2. <文化>と多言語性
 - a. 多言語性の機能
 - b. 多言語性の実践
 - (1). 多文化主義：チャールズ・テイラーの「承認」という概念
 - (2). 多言語主義：その特徴と将来性
3. おわりに：<文化>から文化へ

0.はじめに：何が問題なのか？

われわれは、さまざまな「語りかけ」に対してどのような態度をとるべきであろうか。たとえば、図1-aの写像是、サンディエゴ-ティファナ間にある国境線を越えてアメリカへ密入国するメキシコ人が国境警備官の目を逃れるためにこのあたりのフリーウェイを横断するという現実に対応して設置されたもの〔三浦編1997：210〕である。ここで、英語の「CAUTION（注意）」とスペイン語の「PROHIBIDO（禁止）」との対比に注目してみると次のようなことがわかる。つまりこの道路標識は、単なる二か国語による同一表示ではない。それは同時に複数の聞き手に対して複数の内容を語りかけているのである（図1-bとの比較）。そこでわたしは、このような「語りかけ」に対してナショナリズムと多言語性という二つの視座を用意する。

「ナショナリズム」とは、アーネスト・ゲルナーによると「政治的な単位と文化的な単位とが一致すべきであると語る政治理論」（傍点引用者）〔Gellner1992=1993：20〕である。つまり、ある共同体（社会）での政治を効率よく行うために「社会というまとまりの境界指標」〔Gellner1992=1993：23〕として文化をとらえ、それを政治的に重要な要因として考える現象がナショナリズムである。またアンソニー・スミスによると、ナショナリズムには「未来像、文化、連帯意識、政策」の四つの要素〔Smith1979=1995：12〕がある。ここからもナショナリズムには、単位としての文化が不可欠であることがわかる。つまり、ナショナリズムにとって文化とはその構成分子なのである。

一方多言語性とは、酒井直樹の言う「異質な聞き手への語りかけの構え（heterolingual address）」〔三浦編1997：238〕の実践である。言い換えれば「伝達する（to communicate）」ことが保証されていない状況における「語りかけ（to address）」の実践である。多言語性が実践されている共同体においては、文化（=今後は区別のために<文化>と表示）とはひとつの行動様式及びその実践系である。つまり多言語性にとって、ナショナリズムのいう文化とは個々の行動様式（=<文化>）の漠然とした全体としてしか現象しない。つまりナショナリズムと多言語性にとっての「文化」とは、例えて言うならば自動車とエンジンの関係に現われる。自動車が動いている時、エンジンはそれ自体が自動車の運動を構成している。しかし視点をかえるとエンジンの運動はそれを構成する各 부품の運動の漠然とした現象である。

共同体というものを考えるとき（特に国家を考える場合）、われわれはナショナリズムの視点を重視しがちである。そしてその時、一般にひとつの共同体を構成する成員に対して基本的に潜在的な能力の差

異というものの存在が考慮されない。例えば、われわれが「日本」という共同体を考えると、帰化をして日本人になった外人の例を考慮にいれないで、しばしば「日本語を流暢に話す」という能力が「日本人」には潜在的に備わっているものと考えてしまう。また、「日本文化は外国人には理解し難い」と言う時、その言葉の背後にはある共同体の文化はその成員に等しく内在しているという暗黙の了解が潜んでいる。このような、その文化に属する成員の差異を考慮にいれないことによって、その成員である各個人の「威信 (dignity)」を損ねることになり、カナダのケベック州におけるような分離独立運動へと結びつくこともある。つまり、ひとつの共同体に対して、文化とく文化>の両側面からアプローチしなければならない。そこで、以下私は「国民の本質とは、すべての個人が多くの事柄を共有し、また全員が多くのことを忘れてのことです」[ルナンほか1997:48]というエルネスト・ルナンの言葉を基調にして、ひとつの共同体を、(1)文化の側面から考えるナショナリズムと(2)く文化>の側面から考える多言語性の視座から捉え、両者の理論の接合をはかる。

1.文化とナショナリズム

文化とナショナリズムについての考察に当たって、まず私は、(1)今日のナショナリズム理論の構築において重要な役割を担っている、アーネスト・ゲルナーとアンソニー・スミスの二人の対照的なアプローチをまとめる。そして、(2)今日においてもネイションを考えると、その基調となっている19世紀のエルネスト・ルナンとヨハン・ゴットリーブ・フイヒテの二人のネイション概念について考える。なぜなら(1)(2)は共に、共同体をあらわす指標のひとつとして文化を考えているからである。(1)(2)ではそれを明らかにしたい。そしてこの章の最後に、(3)吉野耕作が提示した創造型ナショナリズムと再構築型ナショナリズムについて考察する。なぜなら、再構築型ナショナリズムにおいては、「ナショナリストなくしてナショナリズムは生じうる」[吉野1997:133]からである。これは、く文化>からもナショナリズムが生じることがあるということを示しており、通常ナショナリズムを扱う際にとられる文化の側面からのアプローチと、次の章であつかうく文化>の側面からのアプローチとの接点が見い出せると考えるからである。

a ネイション/ナショナリズム：文化からのアプローチ

(1)ゲルナーとスミス：ナショナリズムに対する二つのアプローチ

今日のナショナリズム理論において主要な功績を残しているのは、アーネスト・ゲルナーとアンソニー・スミスである。表1は、ゲルナーとスミスそしてその二人を批判的に考察した吉野耕作の三人の理論的特徴を比較したものである。以下表1を使いながら話を進める。

ゲルナーはナショナリズムを「その[文化]の役割が農耕社会と産業社会の途上にある社会の間で、根本的に変化したことに関わっている」[Gellner1992=1993:19]ものとしてとらえている(近代主義的アプローチ)。このアプローチの特徴は、「農耕社会」(前近代)から「産業社会」(近代)への移行期に、文化は「個々の位置を承認するという役割を失い、社会というまとまりの境界指標となった」[Gellner1992=1993:23]とするところにある。また、近代化によって従来の「ネットワークのアイデンティティ ("network" identities)」が「述語的なアイデンティティ ("categorical" identities)」[Taylor1997:33]へと変化した結果、そのアイデンティティの拠り所としてネイションが生じたとする。

つまり「農耕社会」においては、人は同じ身分同士では「三丁目の佐藤さん」的なアイデンティファイの仕方で十分だったし、身分の違う者の間では例えば「お侍さん」とするだけで十分なアイデンティファイの仕方であった。ところが「産業社会」ではそのアイデンティファイの仕方では不十分になった。なぜならそれまでの身分ヒエラルヒー(フランスのアンシャン=レジームや日本の士農工商など)の下位に属していた商人の実権が増し、結果としてそのような身分ヒエラルヒーは崩壊した(市民革命)からである。そのようになると先のアイデンティファイの仕方では不十分であって(これを経済性-共同体性間のジレンマとする)、さらに「自分は~である」的な「真正さ (authenticity)」がアイデンティティに求められる。そのようなとき共同体を維持するために現われたのが「ネイション」概念である(フランス革命によってはじめてネイションのための、ネイションによる国家[ネイション-ステイト]が可能になった)。つまりネイションは「無から (ex nihilo)」の発生(前近代にはネイションのルーツはないということ)である。

また教育システムを通して「高文化 (high culture)」が大衆に伝達され、それによってナショナリズ

ムはエリートから大衆へ（そしてフランスから世界中へ）と広まる。なお高文化とは「コンテキストから離れた（context-free）メッセージを発し、そして理解することのできるような能力に基づくような文化」[Gellner1992=1993:25] のことである（決して文化のレベルの高低をさしているわけではない）。つまり学校教育によって、従来のポティエ・ランゲージなどによる（コンテキストに依存した）コミュニケーションから読み書き能力に基づくコミュニケーションへとコミュニケーション様式が徹底される。そしてその際「どの言語-文化」に属することになるのかということが重視される（エリートから大衆へのナショナリズムの伝播）。

それに対して、スミスのアプローチ（歴史主義的アプローチ）の中心には「エスニー（ethnic）」という共同体の概念がある。エスニー（エスニック・コミュニティ）には、(1)集団に固有の名前の存在（例えば日本という集団に固有の名前の存在）、(2)集団に独自の文化的特徴の共有（日本文化というもの）、(3)共通の祖先に関する神話（『日本書紀』など）、(4)歴史的記憶の共有（『日本史』によって共有されるもの）、(5)固有の「ホームランド」との関係あるいは心理的結びつき（「故郷」と呼ばれるものや、土地に関するノスタルジア）、(6)民族集団を構成する人口の主な部分における連帯感の存在（酒井直樹の言う「共感の共同体」）[吉野1997:20-21]の六つの要素がある。これはゲルナーの「無からの発生」に対する批判である。つまり、スミスは、ナショナリズムの近代性を認めながらも、近代的ネイションの原型（エスニー）があると主張し、「エスニック・アイデンティティの政治的重要性は活性化・衰退の歴史的周期を経る」[吉野1997:21]と指摘する。そしてナショナリズムをエスニーが近代において復活した結果であると考え、近代主義の「経済性-共同体性（階層構造）間のジレンマ」とは異なり「世俗化・科学的国家の拡大」に伴う「共同体の宗教的色彩」の破壊による「合理性-共同体性（宗教性）間のジレンマ」にその理由を見い出す。そしてその際に重要な存在は「意識ある大衆」である。それは、自らのエスニーに対する意識をもっている大衆のことをあらわしている。つまり、スミスのアプローチからすれば、ナショナリズムは「意識ある大衆」に適応したエスニーに基づく神話や記憶、価値などをエリートが覚醒させることによって可能となったものである。

(2) フィヒテとルナン：エリートから見るネイション概念

「エリート」から見るネイション概念とはいかなるものなのであろう。その一つの例として、19世紀に「nation」（国民）という概念をおそらくはじめて明確なものとして扱った人物で、ヨハン・ゴットリーフ・フィヒテ（『ドイツ国民に告ぐ』[1808]）とエルネスト・ルナン（『国民とは何か』[1887]）の二人がいる。以下二人のネイション概念の特徴についてまとめる。

フィヒテは、「ドイツ人」による政治的共同体（国家）の構築の必要性を主張する。彼は言う。「精神性ならびにこの精神性の自由を信じる人、そしてこの精神性を自由を通じて永遠に発展させようと欲する人、そのような人々は、どこで生まれどんな言語を話していても、われわれの同胞なのです」[ルナンほか1997:120]。ここで彼は「精神性」こそが「ドイツ人」たる根拠であるということによって、すべてのドイツ人には「ドイツ人であること（ドイツ人としてのナショナリティ）」が内在されているのであると主張している。さらに当時彼はナポレオン支配下のベルリンにおいてこの講演（『ドイツ国民に告ぐ』）を行ったことを考えると次のようなことがわかる。つまり、彼の言う「ドイツ人」とは理念型としてのドイツ人でありドイツ人の理想像であるということである。『ドイツ国民に告ぐ』の講演をしていた時、「ドイツ人」と呼べる者はいなかったのだ。

ところで、アンソニー・スミスによるとナショナリズムには「未来像、文化、連帯意識、政策」[Smith1979=1995:12]の四つの要素がある。ここから、フィヒテが『ドイツ国民に告ぐ』で「ドイツ人」という観念を打ち出すことにより「ドイツ人」であるべきエリートたちに向かって「未来像」を提出したことがわかるのではないか。

一方、ルナンはネイションとは「意志」であるとする。「それ[ネイション]は明確に表明された共同生活を続行しようとする合意であり、欲望です、個人の存在が生命の耐えざる肯定であると同じく、国民[ネイション]の存在は（この隠喩をお許し下さい）日々の人民投票[un plebiscite de tous les jours]なのです。……国民[ネイション]の願望こそ最終的には唯一の正統な基準であり、常にそこに立ち戻るのなければなりません」[ルナンほか1997:62]。つまり、彼によれば「フランス人でありたい」が「フランス人である」に先立つのである。

以上の点において重要なことは、初めに、フィヒテ自身は国家構築のための手段として、そしてルナン自身は「虚構であるにもかかわらず、それでいてなお、或る、一つの「国民」の名において語ることをためらわない人の、冷めた歴史意識」[ルナンほか1997:285]として、ネイションを扱っていると

いうことである。ここから二人の共同体概念において「文化」を〈文化〉として捉えることを故意に忘れて、ということが見てとれるように思われる。なぜなら〈文化〉はある意味で人々にネイション意識が根付いている時に生じるものだからである（ここで、ルナンの場合は人々の間に既にネイション意識が根付いていたのではないか、という疑問が生ずるが、彼が『国民とは何か』を講演した1882年は、1852～1870年のナポレオン3世による第二帝政が崩壊した時期に近いという事実を考慮に入れば、人々の間に新たなネイション概念を打ち出す必要があったということは理解できるのではないか）。

また、ネイションを自然的基盤に基づいていない観念として捉えているということは両者に共通していることも重要である。それには世俗化されたキリスト教信仰に深く根差しているというところに原因がある〔ルナンほか1997：284〕。つまり、ルナンが「国民とは魂であり、精神的原理です」〔ルナンほか1997：61〕と言う時、そのネイションの過去とのつながりをあらかず「魂」や現在との関連を示す「精神的原理」の背景には世俗化されたキリスト教が潜んでいる。またフィヒテの場合、それがのちに「精神性」が「人種／民族」へとつながる接点をネイション概念に残す結果となる。

最後に重要なこととして、「ネイションであること」という点に関しては二人の立場が微妙に異なるということがあげられる。例えていうならば、フィヒテは「日本人であること」が「日本人」の条件であるとするのに対し、ルナンは「日本人でありたい」ということが「日本人」の条件であると考え、一見すると能力（「日本人であること」）よりも意志（「日本人でありたい」）を重視するので、ルナンの意見の方が優れているようにみえるが、これはエリートから見るネイション概念の限界を示すものである。なぜなら彼が「国民〔ネイション〕の存在は（この隠喩をお許し下さい）日々の人民投票〔un plebiscite de tous les jours〕なのです」〔ルナンほか1997：62〕という時、そこには「選挙権が認められていない住民（未成年や女性）」の存在が考慮に入られていないからである。つまり彼らの意志は「意志」として認められないのである。そしてそこには文化の個性は認めても〈文化〉の個性は認めないということと同じ関係がある。

以上の点で、ネイション／ナショナリズムを考える時、いかにひとつの共同体の境界を示すものとしての文化を重視するのかが示した。その際に、彼らのネイション／ナショナリズム理論は基本的にネイションという観念の形成期においてのものであることに注目しなければならない。今日世界中でネイションという観念を持たずにいる者はないといってもよい状況において、先に挙げた理論だけでは不十分である。そこでそれを補うもののひとつとして、吉野耕作はナショナリズムを二つに分類する。次の節ではそれをみていく。

b 創造型ナショナリズムと再構築型ナショナリズム

吉野耕作は、ナショナリズムを創造型ナショナリズムと再構築型ナショナリズムの二つに分ける。表2は、両者の特徴をあらわしたものである。以下説明において表2を参考にしてほしい。

創造型ナショナリズムは、文字通りネイションを創造する段階での（a-1）で扱った）ナショナリズムである。そこでは、自他の文化の差異よりも歴史的記憶を重視する。つまり自文化というものを構築し、それを絶対的なものとして考えるのである。結果としてそれは原初主義的手法をとる。原初主義とは、民族共同体の時間的持続性を最重要視する立場である〔吉野1997：25〕。そしてその担い手は、歴史家、芸術家、詩人、である。彼らは（信憑性よりもその「詩的、教訓的、統合的」目的が重視される〔吉野1997：61〕）「歴史」を創る役割を担っている。つまり、彼らは「正しさ」よりも「美しさ」を重視するネイション起源を提示する。そしてこのような「美しい」ネイション起源が内面化されることによって、それまで単なる「人々（people）」であったものが、「国民（nation）」へと変化するるのである。

それに対して、再構築型ナショナリズムは、既にネイションへの帰属感が定着しているところで、ナショナル・アイデンティティを維持、促進するタイプの活動である〔吉野1997：59〕。そこでは「なぜ自分の属しているネイションとほかのネイションとは異なるのか」という疑問に応えるため、自他の文化の差異を強調する必要性が生じる。よって境界主義的手法がとられる。境界主義とは「自・他のシンボリックな境界過程を民族成立・存続の第一義的条件と考える」〔吉野1997：25〕立場である。よって歴史的記憶（歴史的なつながり）よりも空間的境界を重視する。担い手は、研究者、ジャーナリスト、批評家、外交官、作家、企業人などの広い意味での社会学者、文化人類学者である。彼らは信憑性のある自文化のシンボリックな特徴を大衆に広める。その場合、エリートとは異なる「文化仲介者」

というものが「意識ある大衆」に対して「ネイションであること」を覚醒させる（表1参照）。文化仲介者とは、「シンボリックな財とサービスの提供に従事する人々であり、マーケティング、広告、PR、メディアのプロデューサーとプレゼンター、ソーシャル・ワーカーやカウンセラーといった援助的職業などが含まれる」社会的カテゴリーである〔吉野1997：243〕。

この再構築型のナショナリズムの最も典型的な例は「国民性論」（例えば「日本人論」）である。ここでは、〈文化〉（＝さまざまな行動様式やその実践）から文化（＝社会というまとまりの境界指標）が導出されるのだが、それには具象的・制度論的なく文化〉と抽象的・全体論的なく文化〉との二種類が可能である。例えば、具象的な「お辞儀をする」という〈文化〉と「和を尊ぶ」といった抽象的なく文化〉との両方から「日本文化」の導出が可能である。それに対して、創造型ナショナリズムの場合には、「日本文化」をまず打ち出し、それからフィヒテがそうであったようにあくまで抽象的・全体論的なく文化〉（例えば「和を尊ぶ」）の導出が可能である。この〈文化〉と文化との関係は、その共同体の成員にネイションが内面化されているかどうかによって決まる。

また再構築型のナショナリズムの場合、境界過程において「自民族中心主義（ethnocentrism）」（「我々」の価値こそが正当な尺度であり「彼ら」の価値をその「標準的」尺度から測った差異とする考え方〔吉野1997：104〕）と「自民族周辺主義（ethnoperipherism）」（「中心」文明に対して自らを「周辺」と位置づけ、「普遍的」な規範をもつとされるものとの差異化を測るために、自らの「個別性」「特殊性」を強調する考え方〔吉野1997：105〕）のどちらかをとる。例えば、「中華思想」と呼ばれるものは前者の例に当てはまるし、後者の例としては「日本人論」というものが当てはまる。これは私の推測であるが、西欧は前者、非西欧は後者に当てはまると思われる。

最後に、この二つのナショナリズムについては次のことが言える。つまり、創造型ナショナリズム→再構築型ナショナリズム→創造型ナショナリズムという悪循環が生じる可能性がある。ルナンは「国民の本質とは、すべての個人が多くの事柄を共有し、また全員が多くのことを忘れていくことです」〔ルナンほか1997：48〕と言うが、それには、文化の共有と歴史的事実の忘却という一見矛盾したことが同時に可能となるのが国民（ネイション）である、ということが示されている。しかし、再構築型ナショナリズムはこの「忘却」部分を蘇らせてしまう可能性を持っている。なぜなら、例えば旧ソ連やその他の旧共産圏のように、「信憑さ」がネイション起源の「美しさ」を破壊することもありうるからだ。それではナショナリズムそのものをどのように捉える（または捉え直す）べきなのか。私はそれをネイションの空間的配分という視座からみていく。その際不可避な存在として現われるもの、それは多言語性ということである。

2.〈文化〉と多言語性

〈文化〉と多言語性を扱う際に、私は(1)多言語性とは何か、そしてその機能は何か、なぜ重視しなければならないのか、を考える。その次に(2)多言語性の実践として多文化主義／多言語主義をみていく。その際に、多言語性の実践に当たってどのような問題が生じているのか、またその原因はどこにあるのか、を考える。それによって私は、もともと無国籍である〈文化〉（＝行動様式）がいかにしてナショナリティをその身に帯びるようになるのかを見ていきたい。

a 多言語性の機能

われわれが「日本人」というものを考えるとき、一般に「日本語」「日本文化」は不可避な存在である。われわれはしばしば「日本文化」のなかに日本人としてのナショナリティが内在されていると考えてしまう。このようなことはすべて〈文化〉を国家と同一の範囲のものとして（つまり文化として）考えているところからくる。酒井直樹によると、〈文化〉とは「行動の様式あるいは実践系」〔酒井他編1996：13〕である。つまり泳げる人と泳げない人との間には〈文化〉の差異に基づく経験の非共約性（泳げない人に向かって泳ぐ経験をどのように伝えても分かってもらえない）が生まれると考える。このようにすると「文化」（文化と〈文化〉）とは有機的な統一体ではないことがわかる。もちろん、日本文化というものが存在しない、ということではない。「日本にある諸々の文化の雑然とした集合」という意味での日本文化は容認できても、日本人の本来性を担うような有機的統一体としての日本文化は存在しない〔酒井他編1996：14〕ということである。そしてそこからナショナリティが〈文化〉に内在している（i）のではなくて、〈文化〉はナショナリティによって包含されている（ii）のである（図2参照）ということがわかる。例えば、「スーツを着る」という〈文化〉は確かにヨーロッパにおいて始まったものであるが、そのスーツを着ること自体にイギリスのナショナリティが内在しているわ

けではない。だから「日本人」が「スーツを着」てもイギリスのナショナリティを身に帯びるわけではない。そこから「文化」は基本的に無国籍である、ということが言える。

ではなぜ「文化」が「多言語性」に関わるのだろうか。次に「私は日本語を話します」という例をみて考える。「私は日本語を話します」と（日本語を話す）私が言う時、その（対象としての）「日本語」は言葉の漠然とした集合の観念である。そしてこの時の「日本語」というものは「母語」と呼ばれ、ここでは「私」と「母語」という観念との想像的な関係（母語の直接性）が成立している〔酒井他編1996：30〕。ここで思い出してほしいのは「文化」と文化との関係である。「私は日本語を話します」と日本語で言う時、その日本語は行動様式のひとつであるからそれは「文化」である。それに対して「母語」である日本語は文化である。ここでの私の目標は「文化」と文化との区別をつけることにあるから、「文化」である「日本語」と文化である日本語との明確な区別は避けて通れないことである。つまり、なぜ「お花見」という「文化」がナショナリティを帯びた「文化」として捉えられるのかということ、を、「日本語」と日本語との関係をみることに明確に示したいのである。この際に（「日本語」と日本語との区別のほかに）重要なことは、「主体の分裂」ということである。次にその過程をみていく。

「人間は言語に対して常に外人であり、すべての言語は人にとって外国語でしかない。」〔酒井他編1996：29〕と酒井は言う。このような事実が顕在化されるのは翻訳行為においてである。表3は、翻訳者の行動を言語化したものである。注目すべきはⅡとⅢの、実際には事後的に翻訳者自身が確認する行為である。翻訳者にはあくまで言語行為の主体を「わたし」にしてはならないという暗黙の了解があるから、あくまで発話主体は話し手である「トム」なのである。だから聞き手（ケン）の方は、「今日はいい天気だ」と思っている人は実際に聞き手（ケン）に話した翻訳者（わたし）ではなく、話し手である「トム」であると「想像」する。だがここで、話し手を「トム」ではなく「わたし」にしたらどうなるだろうか。Ⅱの段階ではこうなるだろう。「今日はいい天気だ」とわたしが言った。Ⅲでは、「今日はいい天気だ」とわたしが言った」とわたしが言う。となる。結果として聞き手に伝わるのは、「今日はいい天気だ」と言うことになり、この場合聞き手は「今日はいい天気だ」と思っているのはわたしであると想像するだろう。つまり、翻訳者の発話行為（Ⅲ→Ⅳ）において「わたし」は「わたし」とわたしとに分裂するのである。つまり聞き手が想像する「わたし」はわたしであり、「今日はいい天気だ」とⅢの段階で（実際に）言う「わたし」は「わたし」である（先に言ったようにⅡとⅢは事後的に「わたし」が想像するわけであるからそこでの「わたし」はすべてわたしである）。だから先の「人間は言語に対して常に外人」であるとは、（「文化」（＝行動様式）の「主体」としての）「わたし」は（想像されたものとしての文化としての）日本語に対して常に疎外されているということである。そしてこのことは例に挙げたように二言語間翻訳（英語→日本語）だけではなく、同一言語間でのコミュニケーション（日本語→日本語）においても当てはまる。

ここまでみてきた「文化」（＝行動様式）と文化（＝漠然とした想像体）との関係、「日本語」（＝言語）と日本語（＝母語）との関係、そして「わたし」（＝行動様式の「主体」）とわたし（＝想像された対象としての「主体」）との関係をふまえて、再び図1-aを見てみよう。この道路標識のある場所はアメリカである。そこから考えると「CAUTION」は母語（＝アメリカ語）として語りかけているのに対し、「PROHIBIDO」は言語（＝「スペイン語」）として語りかけていることに気がつく。つまり「アメリカ」という「当然としての言語共同体（同じ言語を共有しているのだからコミュニケーションが保証されていて当然だ）」（それは「願望としての言語共同体（同じ母語を共有しているのだからコミュニケーションが保証されてあるべきだ）」から導かれるものであるが）〔三浦編1997：234-235〕において、主体を共有しているアメリカ人と、それを共有していない「メキシコ人」との分裂が示されているのである。それに対して図1-bは四か国語でかかれてはいてもそれらはすべて母語として存在している。このように「文化」（＝「文化」と文化）を考えるに当たって「多言語性（「異質な聞き手への語りかけの構え（heterolingual address）」〔三浦編1997：238〕の実践）」について考えることは「文化」を文化として捉えてしまう間違いを防ぐことになるのである。

これから「一国に複数の文化、言語の共存を目指すこと」を理想とする多文化主義、多言語主義をみていくが、しばしばそれらの理念は結果としてナショナリズムを強化することになり、カナダ、ケベック州における分離独立運動のような方向へマイノリティを導いてしまったり、（もともと移民の国である）オーストラリアのようにこれ以上の移民受け入れを拒否しようとするというような運動が生じている。そこにはどのような問題が潜んでいるのだろうか。以下「文化」と文化、「言語」と母語、そして「主体」と主体との関係からみていく。

b 多言語性の実践

(1) 多文化主義：チャールズ・テイラーの「承認」という概念

チャールズ・テイラーの多文化主義に対するアプローチは、アイデンティティ概念からはじまる。彼はそれが「他者の愛や承認を得ることによってのみ」[Taylor1996:13-14]可能であるとする「対話的な(dialogical)」アイデンティティの立場をとる。そしてその根本には「人間は他者からアイデンティティを承認されるときにだけ、善く生きていくこと」[Taylor1996:7]という考えがある。

これに対する見方のひとつとして、主体が「承認」されない限り、<主体>として「善く生きる」ことができない、というものがある。例えば、チャールズ・テイラーの故郷であるカナダ、ケベック州には、ケベックが主体として承認されていないということから生じた、英語系カナダとフランス語系ケベックとの対立(ケベック問題)がある。そしてその問題を解決するためのひとつの主張として、ケベックをカナダから分離独立させようとする「分離主義」がおこった。これは一見すると「承認」されていない主体(つまりケベックとしての主体)をカナダという別の主体から切り離すことによって、承認される主体の実現をはかったものであるから、尊重すべきことのようにみえるが、実はそれはナショナリズムを強化させるものとして捉えなければならないことである。なぜなら、承認されていない(マイノリティの)主体を承認される(マジョリティの)主体にすることを、マイノリティの主体をマジョリティのそれから切り離すことによって実現するには、マイノリティにあてがうだけの土地があまりに少ない。例えば、ケベック州には英語系カナダとフランス語系ケベックのマジョリティに対して、さらにイヌイットと、クリーヤナスカピ、インヌ(モンテニャー)といったインディアン集団というマイノリティが存在している。このようなことを考えれば「分離主義」というものは主体にとっては健康的なことであるが、<主体>にとっては非常に不健康である。このことはいままでの国民国家の限界(主体を戦争によって獲得、維持、拡大する)をみるとより明らかである。つまり今日アメリカやカナダ、そしてオーストラリアなどで生じている問題の多くは、マイノリティ、マジョリティ共に主体というものを維持、獲得するために生じるコンフリクトが原因である。

つまりこの見方(主体が「承認」されない限り、<主体>として「善く生きる」ことができない)は、ナショナリズムに結びつくものであり、しばしば限界にたどりつく。そして同時にこれが「多文化主義」を理念とする場合にしばしば陥る限界ともなる。つまりそこには<文化>、<言語>、<主体>への考慮が故意に忘れられているのである。

(2) 多言語主義：その特徴と将来性

多言語主義を理念として尊重している最も有名な例は、EUである。たとえば、EC(EU)の領域内で話されている言語のうち、母国語以外の最低二言語でコミュニケーションをできる能力を与えようとする計画(リングァ計画:1989~1994)などのように積極的に「言語の平等性」の実現を目指す言語計画(政策)がとられている。

しかしながら現実問題として、多言語主義の実践には莫大なコストがかかる。例えば、言語の平等性を可能にするために必要な「翻訳と通訳の費用は、ECの行政管理上の予算の40パーセント、あるいは110億アメリカ・ドル以上にもなるといわれている」[マクレイ1993=1995:57]。そのため、公用語に加えて実務用言語というものが用意されて、実際のEUの会議では実務用言語である英語を用いその後に各公用語に翻訳するような形がとられている場合もある。このように言語の平等性を理念としていながらも実際にはある特定の言語使用に集中する傾向にある。つまりEUやベルギー、スイスにおいても、複数言語併用を見直さなければいけない状況にある。

また同時に言語の平等性の名の下に、少数言語を維持、再生させようとする活動がある。例えば南フランスの少数言語であるオクシタン語(occitan)の場合がそうである。しかしその際に生じる問題は、オクシタン語が「少数言語」であるといっているのはむしろ言語研究者の方であり、実際にその言語を日常的に使っている「バトワザン」にとってはオクシタン語は単なる「バトワ(方言)」であると意識している場合が多い[佐野1997:279]。つまり言語の平等性の名の下になされている活動が、逆に<主体>を削りだし、結果として主体を求める運動に結びつく可能性がある。

本来、このような言語計画(政策)にとっての多言語主義とは「言語の多様性に意義を認め、互いに相手の言葉を学びあうことで意思の疎通をはかろうとする態度」[三浦編1997:12]である。だから、ベルギーやスイスなどのような複数の言語が公用語とされている国においても、多言語主義がとら

れているわけではない。むしろそのような国は連邦制をとって主体（母語）の棲み分けを行っている場合が多い。

多文化主義はしばしば同化政策（マジョリティの主体に同化、または分離独立して別のマジョリティを形成する）か、サラダボウル化（主体（母語）の棲み分け）の方向へ向かう。その理由は先に述べたように、〈文化〉、〈言語〉、〈主体〉への故意の忘却である。そのようにすることによって、文化、母語、主体をそれぞれ本来的に一様なもの、モノトーンなものとして考えることができるからである。それに対して多言語主義は、「言語の多様性に意義を認」めるのだから、それは〈言語〉から母語への現象のプロセスを積極的に認めることになる。つまり複数の互いに非共役的な〈言語〉から母語というものが現象されるということ、そしてその際に多くの〈言語〉が死滅して母語として現われるということに意義を認めるのである。つまり母語は「死産される」¹⁾。そのようなことを意識することによって、われわれは他言語に対して少なくとも寛容な態度をとることができる。またこれは〈文化〉と文化、〈主体〉と主体との関係にも対応しているから、多文化主義を補完することも可能である。つまり多言語主義の実践は言語の空間的配分を考えるものではなく、むしろ母語というものの直接性（本来性）を見直すことである。¹⁾

3おわりに：〈文化〉から文化へ

ナショナルリズムは文化を本来的なものとして捉えるところから始まる。それに対して多言語性は〈文化〉が本来的なものであるとしている。なぜならナショナルリズムはネイション-ステイトというものを創る必要から、ネイションという文化を必要とするからである。また、多言語性はネイションというものが基本にあってそれをより柔軟なものにするために必要とされるものであるからだ。

私は〈文化〉と文化、〈言語〉と母語、〈主体〉と主体、と言う視座を用意して、そこからネイションというものを捉え直してきた。では、これまで述べてきた内容の基調となった「国民の本質とは、すべての個人が多くの事柄を共有し、また全員が多くのことを忘れていくことです」〔ルナンほか 1997：48〕というエルネスト・ルナンの言葉をいかなる意味で捉えるべきだろうか。わたしは、「すべての個人が多くの事柄を共有し」とは諸個人が諸〈文化〉を接点としてチェーン状に（しかも複雑に）つながっている状態のことであり、「また全員が多くのことを忘れていくこと」とはそのようにしてできた（ベネディクト・アンダーソンの言う）「想像の共同体」において、諸個人が諸〈文化〉につながれている状態を忘れて、全体がモノトーンの文化に内包されていると考えるようになることである、と理解する。このように理解することによって、ネイション（文化、母語、主体）の本来性を多言語性の視座（〈文化〉、〈言語〉、〈主体〉）から見直し、脱構築することができるのである。

【参考文献】

- Gellner,E [1992=1993] 『今日のナショナリズム』多和田裕司 訳 『思想』832号 19～33頁
- D.Smith,A [1979=1995] 『20世紀のナショナリズム』巢山靖司 監訳 法律文化社
- 三浦信孝編 [1997] 『多言語主義とは何か』 藤原書店
- ルナン,E [1997] 『国民とは何か』 鶴飼哲ほか訳 インスタクリフト
- 吉野耕作 [1997] 『文化ナショナリズムの社会学』 名古屋大学出版会
- [1992] 『ナショナリズムの比較歴史社会学(書評)』『ソフィア』41(2)号293～296頁
- 筒井清忠編 [1997] 『歴史社会学のフロンティア』 人文書院
- 青木保 [1993] 『文化とナショナリズム—一つの問題提起』『思想』823号 4～18頁
- アンダーソン,B [1983→1991=1997] 『増補 想像の共同体』 白石さや・白石隆訳 NTT出版
- Miller,D [1995] 『On Nationality』 Oxford University Press
- Taylor,C [1994=1996] 『承認をめぐる政治』『マルチカルチュラリズム』岩波書店 37～110頁
- [1997] 『Nationalism and Modernity』『The Morality of Nationalism』Oxford University Press 31～55頁
- [1996] 『多文化主義・承認・ヘーゲル(インタビュー)』岩崎稔・辻内鏡人訳『思想』865号 4～27頁
- 酒井直樹 [1997] 『日本思想という問題』 岩波書店
- [1996] 『ナショナリティと母(国)語の政治』『ナショナリティの脱構築』柏書房9～53頁
- 大澤真幸 [1997] 『言語的な純粋性/言語的な雑種性(書評)』『思想』881号 111～125頁
- 西川・渡部・マコーリック編 [1997] 『多文化主義・多言語主義—カナダ、オーストラリアそして日本』人文書院
- 佐野直子 [1997] 『「少数言語」の新しい在り方—オクタシオン語の場合—』『ライブラリ相関社会科学』言語・国家、そして権力』新世社 269～290頁
- 三竹直哉 [1995] 『連邦制ベルギーの国家とアイデンティティ』『国際政治』第110号 114～127頁
- マクレー,K [1993=1995] 『ECにおける多言語政策の展開とその課題』加藤普章 訳『国際政治』第110号 55～69頁
- 阿部汎克 [1995] 『スイスの言語状況とアイデンティティ』『国際政治』第110号99～113頁
- 栗原福也編 [1995] 『世界の歴史と文化 オランダ・ベルギー』 新潮社

【図・表一覧】

図1-a



図1-b

ベルギーは多言語国家「スリにご用心」の注意書きも、上からオランダ語、フランス語、ドイツ語、英語(これは観光客用?)で記されている。ゲントにて



表1

アプローチ	ゲルナー 近代主義	スミス 歴史主義	吉野耕作 -----
ネーション の歴史的要因	「無からの発生」	エスニー (ethnie)	-----
ナショナリズム の伝播	エリート→ 大衆 (伝播)	エリート→ 意識ある大衆 (覚醒)	エリート→大衆 (学校を通して) 文化仲介者→意識ある大衆 (生活を通して)
	(創造型ナショナリズム)		(創造型ナショナリズム) (再構築型ナショナリズム)

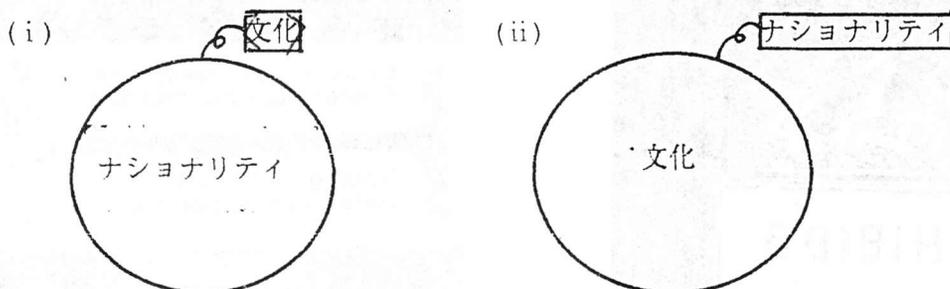
表2

	創造型ナショナリズム	再構築型ナショナリズム
手法	祖先起源／祖先文化 (原初主義)	独自感 「自民族独自論」 (境界主義)
特徴	歴史的記憶重視	空間的境界重視
担い手	歴史家、芸術家、詩人	社会学者、文化人類学者
事例	明治期の日本	「日本人論」

表3

話し手 (トム)	I : It's fine today.
翻訳者 (私)	II : 「今日はいい天気だ」と彼が言った。[聞き手としての働き] III : 「「今日はいい天気だ」と彼が言った」と私が言う。[話し手としての働き]
聞き手 (ケン)	IV : 話し手 (トム) が「今日はいい天気だ」と言ったという事実を「想像する」

図2



【図・表出所】

図1-a : 『多言語主義とは何か』 211頁

図1-b : 『世界の歴史と文化 オランダ・ベルギー』 295頁

表1、2 : 『文化ナショナリズムの社会学』から作成

図2 : 「ナショナリティと母(国)語の政治」『ナショナリティの脱構築』柏書房9～53頁から作成